

横山ゆずり作 「受験」 パート3

<前編>「兄の青春」

- (効果音) (授業終了のチャイム、教室のガヤ)
- 生徒たち (口々に)「さよなら」「じゃね、先に帰るね。」etc.
- 先生 あ、三宅、ちょっと。
- 三宅真由子 はい、何ですか？
- 先生 今度の三者面談のことだが、お前のとこだけ、日時の希望が出てないぞ。そろそろ志望校を決める大事な時だから、おうちの人とよく話し合って、都合のよい日を早めに連絡しなさい。
- 真由子 あ、うちの母はちょっと来られないと思うんですけど。
- 先生 うーん、そりゃ困ったなあ。三宅のところは、春の父兄面談にも来られなかったからなあ。お忙しいかもしれんが、何とか都合つけてもらえんかな。
- 真由子 はい。
- 女子 A 真由子、どしたの？ 先生何だって？
- 真由子 うん。三者面談のこと、やっぱり親に来てもらわないとまずいって。来たって、どうせうちの母親、あたしの高校受験なんか、今眼中にないみたいだし。毎日毎日ただボンヤリ過ごしてるって感じで、とても相談するって雰囲気じゃないんだ。
- 女子 A ふーん。やっぱりお兄さんのことのショックが、まだ続いているのかなあ。
- 真由子 うん、そうだと思う。
- 女子 A 真由子も大変だね。
- 真由子 まあね。
- 真由子ナレーション わたし、三宅真由子。青春中学 3 年生。数か月後に迫った高校受験に向けて、着々と準備を進めている時期、のはずなんだけど…。
- (効果音) (玄関のドアの開く音)
- 真由子 ただいま。お母さんいないの？ ただいま！ なーんだ、いるんなら返事ぐらいしてよ。ビックリするじゃない。
- 母 あ、お帰り。2 階にいたもんだから、声が聞こえなかったのよ。
- 真由子 お母さん、また高広兄さんの部屋でボーっとしてたんでしょ。ダメだって、毎日そんなことばっかしてたら、体壊すよ。
- 母 はいはい、分かってますよ。でもねえ、ついつい高広のことばかり考えちゃってねえ。
- ナレーション わたしの兄、三宅高広が死んで、そろそろ 1 年になろうとしている。頭がよくて、一流中学、高校。そして東大と、人がうらやまがしがらうようなエリートコースを歩いていたのに、去年の秋、突然病気で倒れてから、あっと言う間に死んでしまった

お兄ちゃん。まだ大学 2 年生だった。それ以来母はショックで、しばらくの間寝込んでしまい、少し体調が戻ったら、今度は、以前のままにしてあるお兄ちゃんの部屋で、毎日ボンヤリばかりしているみたい。

真由子 お母さん、お兄ちゃんの部屋、思い切ってそろそろ片づけたほうがいいんじゃない？

母 ダメですよ！ あの部屋に座っているとね、高広が小学生だった時のこと、思い出すわ。そう、ちょうど小学校 6 年生の今ごろ、受験する中学も大体決まって、猛勉強してたころだね。夜 10 時ころ塾から帰ってきたあの子に、急いでご飯食べさせて、お母さん、付きっ切りで勉強してたのよね。あのころから、有名中学の御三家って言われるようなところは、'四当五落'なんて言って、それこそ睡眠時間を削ってみんな必死で頑張ってたからねえ。

、真由子 覚えてる。あたし、まだ小さかったから、「何でうちのお兄ちゃんは、塾から帰ってきて、それから部屋に入って勉強ばかりしてるんだろう」って思ってた。「友達はお兄ちゃんに遊んでもらったり、いろんなところへ連れてってもらったりしてるのに、うちだけどうして？」って。

母 そりゃあなた、高広は、ほかの、公立の中学にそのまま行くような子とは違ってたんだから、当然よ。そのかいあって、名門高嶺中学に合格できたんだし。

真由子 そりゃそうだけど、でも、なんかちょっとかわいそうだったな、妹のあたしから見ても。だってお兄ちゃん、中学の時も、高校の時も、一度も友達をうちに連れてきたことなかったんだよね。

母 それは、ああいうところは、結局みんな、東大を目指している子ばかりですからね。もう中学の時から、ライバルって意識があるんでしょ。お母さんだって、高広を高嶺に入れるために、どれだけ頑張ったか。塾の父母の会に行くたびに、ほかのこのお母さんたちのすごさを見せつけられて、うちも負けちゃいけないって、必死だったわ。

真由子 それって、教育ママゴンの大集会でしょ。あーコワ。

母 そうよ。中にはね、子供が勉強してる間、ずっとついてて、子供が鼻をかみたくなると、さっとティッシュ出して、チーンって鼻かませてやるっていうお母さんもいたのよ。勉強中に鼻かむと、思考が中断されるし、時間ももったいないからって。それで、そのお母さん、'本番の試験の時に、うちの子、鼻かみたくなったらどうすればいいんでしょ。阿多くしが試験場までついていくわけには参りませんし'って、真剣に塾の先生に質問してるのよ。あれにはお母さんもビックリしたわねえ。よそのうちは、こんなにすごいのかって思ったわ。

真由子 ゲー！ 気持ち悪い。そんなの異常じゃん。ひょっとしてお母さんも？

母 まさか。そこまではしませんよ。でも気持ちとしては、それくらいのものがあったわね。だから、あの子が高嶺中に受かった時は、本当にうれしかった。これで、東大、

そして一流企業っていう将来が約束されたと思ったわ。それなのに、それなのに、あんなに早く^い逝ってしまうなんて。まだ^{はたち}二十で。何もかもこれからっていう時に…。

真由子 お母さん、それはもういくら言ってもしょうがないんだから。ね？ ねえ、受験って言えば、今度、あたしが高校受験なんだけどな。分かってる？

母 あ、そうだったわね。

真由子 「そうだったわね」じゃないよ。全くもう。少しはこっちを心配してくれてもいいんじゃない？ ねえ、来週、学校に来てくれるでしょ。先生との面談があるからさ。もう志望校決めないといけないんだよ。

母 そうね。考えとくわ。

ナレーション 母と話をしながら、わたしは、自分の記憶の中の兄の姿を思い浮かべていた。わたしが覚えているのは、いつも机に向かっていた兄の後ろ姿。

(音楽) (ブリッジ) (記憶の中)

真由子 (4、5 歳) お兄ちゃん。お兄ちゃんはどうしていつもお勉強ばかりしてるの？ お勉強って面白い？

高広 (12、3 歳) 面白くないさ。

真由子 面白くないのなら、やめればいいのに。それで、真由子と一緒に遊べばいいのに。

高広 バカだな、真由子。面白くなくても、やらなくちゃならないんだよ。

真由子 どうして？

高広 どうしてって…。いい学校に入るためさ。僕は東大に入らなくちゃ。

真由子 それからどうするの？

高広 それから？ うん、多分、一流企業に入る。

真由子 それから？

高広 それからって…。そんなの分かんないさ。でも、「高嶺中に入って、東代に入って、一流企業に入れば、偉い大人になれる」って、お母さんや塾の先生が言ってるからさ。だから今は、我慢して勉強しなさい」って。

真由子 ふーん。お兄ちゃん、いつまで我慢するの？

高広 いつまでかなあ。東大に入るまで…。ううん、一流企業に入るまでかな。そうしたら僕、そのときは、思いっきり好きなことをするんだ。

真由子 なあに？ お兄ちゃん、何するの？

高広 それは、真由子にも秘密だな。真由子もう少し大きくなったら教えてやるよ。

真由子 ほんと？ 約束よ。

高広 ああ、いいよ。

真由子 じゃあ、指切り！

二人で 指切りげんまん、ウソついたら針千本飲一ます。指切った！ (笑い)

(音楽) (ブリッジ)(回想終わり)

真由子モノローグ お兄ちゃん…。あんなに頑張って目標の東大に入ったのに。今まで我慢してたことを、もうすぐやれるはずだったのに。こんなことになるなんて。何のために、遊びたいのも眠いのも我慢してやってきたのか分かんないじゃない。お兄ちゃん、かわいそう。どうせ 20 年の短い命なら、もっとやりたいことを思いっきりやってあげばよかったじゃない。そうよ、“将来、きっといいことがあるから”なんて、我慢して我慢して頑張っても、死んじやったら何にもならないんだ。つらい思いして生きた時間は、一体どうなるって言うの？ お兄ちゃんの苦労は、結局無駄になっただけ。そんなのむなしい。むなしすぎるよ！ (多重エコー)

<後編>「わたしの道」

ナレーション わたしの兄、三宅高広は、子供のころから優等生で、一流中学、高校から東大と、エリートコースをストレートに歩いてきた人だった。そんな兄が急に病気で倒れたのが、去年の秋。それからしばらくしてのあっけない死。まだ二十、大学 2 年生だった。生きている間ずっと、そう、10 年以上もの歳月を受験勉強に費やし、その結果としての約束された将来を手にもすることなく死んでいった兄。今、高校受験という場に自分が立たされてみて、改めて兄の死の悲しさ、むなしさを感じないではいられない。東大卒という学歴も、命が終わってしまったら何にもならないのだ。

(効果音) (教室のガヤ)

生徒 A ねえ、志望校どこにした？

生徒 B あたしはシオン女子大付属。だってさ、大学受験ってすごく大変だっていうじゃない。シオン女子付属ならさ、高校入っちゃえばさ、そのまま大学まで 7 年間ポン！ だからね。

生徒 C あー、安易なやつ。試験は実力の勝負なんだからさ、やっぱ、実力の一発勝負に出なきゃ。

生徒 D それで落っこちたら、目も当てらんないって。やっぱ、学校推薦取っというほうがいいんじゃないの？ 本番でかなり有利だっていうよ。

生徒 E そうだよ。高校受験で、ある程度、人生決まるもんね。

生徒 A うん、言えてる。まあ“人生決まる”っていうのはオーバーにしても、ある程度、将来が見えてきちゃうもんね。だからみんな迷うんだと思うよ。初めて、自分で自分の進む道の選択をしなくちゃならないわけだからさ。

真由子 うん、だから不安なんだよね。それで、その不安を打ち消そうとして、わざと明るく振る舞ったり、バカ言ったりしちゃうのかもね。でもね、あたし思うんだけど、みんな…もちろんあたしも含めてだけどさ、自分でいろいろ悩んだり迷ったりできるっていうのも、幸せかな、なんてさ。

生徒 A 真由子、それ、どういうこと？
真由子 うん。あのね、うちのお兄ちゃんは、確かに名門の学校を出て東大に入ったけど、それは、自分の意志って言うより、小学生の時に親に敷かれたレールだったんだよね。結局。特に、お母さんの期待を一身に受けてたから、ただもウソのレールの上を走り続けるしかなかった。自分できちんと悩んだり迷ったりしながら選んでいく自由っていうのが、全くなかったと思うんだ。

生徒 A 悩んだり迷ったりする自由か…。
真由子 うん。ただ親に言われた、「いい学校出て、いい会社には入れれば、いい人生が待ってる」っていう親の価値観を押し付けられていたんだよね。あたし、お兄ちゃんのお葬式の時、本当にショックだったんだ。もちろん急だったこともあるけど、お通夜と告別式に来てくれたお兄ちゃんの友達、ほんの少しだった。勉強に忙しくて、友達付き合いもあんまりしてないっていうのは、薄々知ってたけど、でも、お葬式で泣いてくれる友達もいないなんて、と思ったら、本当にお兄ちゃんがかわいそうだった。

ナレーション それからしばらくして、わたしは学校の先生との面談を母と一緒に受けた。その帰り道、ふと立ち寄った駅前のラーメン屋さんでのことだった。

真由子 ああ寒かった。こんな日はやっぱりあったかいラーメンが一番だね。
母 そうね。それにしても真由子、さっきの先生のお話だと、あなたが志望してたところ、大丈夫そうじゃない？

真由子 うん、まあね。
母 ひと安心してところね。でも気を緩めちゃダメよ。
真由子 はいはい。ねえお母さん、さっきから気になってたんだけど、あそこに架かっている額に入った写真、もしかしてここのおじさんかな。
母 あら、そうねえ、言われてみれば。じゃ、ここのご家族の記念写真かしら。でもあの真ん中の人、何だか博士さんみたいな帽子かぶってるわよ。
真由子 うん…。
店の主人 はいお待ちどう。こちらがラーメンで、お嬢さんがチャーシューメン。
真由子 はい。あの、おじさん、あの写真、おじさんのうちの人ですか？
主人 あ、あれですか？ はい、お恥ずかしいんですが、うちのものの写真、架けさせてもらってます。
母 あの真ん中の方、ずいぶんご立派ですねえ。もしかして息子さん、ですか？
主人 はあ、上のせがれでして。アメリカの大学で博士号を取った時のやつなんですかね。
母 まあ、博士号を！ それはご立派ですね。ご両親はさぞ熱心にご指導なすったんでしょね。
主人 いやいや、とんでもない。あたしもうちのやつも、とにかく店が忙しいもんで、子

供のことはほったらかしだったんですよ。邪魔くさいもんで、ガキのころはとにかく外へ行け、外へ行け」って追い出していましたねえ。だから遊んでばっかいたんですよけどね、上のやつは、たまたま担任の先生に薦められて受けた、高嶺高校とかいうのに受かちまって。それで、大学も勝手に自分で決めて東大入っちまって。それからアメリカに留学するとか言い出しましてね。今は発展途上国の医療援助とかいうのに行ってます。次男のほうは、勉強のほうはさっぱりでね。高校出てから、おやじの店、継ぐから」とか言って、調理師の学校に行ってるんですよ。二人とも自分で勝手にやってるみたいですけどね。まあ手はかからるので助かってます。

真由子　　すごい。勉強しなさい」とか言わなかったんですか？

主人　　いやあ、一遍も言ったことないですね。うーん、ただもう夫婦二人して、まじめに働いて店やってぐだけで精一杯でね。そんな親の姿を分かってくれたんでしょかね。あいつら、二人とも、ガキのころから、近所の教会に行ってたみたいなんですよ。

真由子　　教会って、キリスト教の？

主人　　ええ。そいでね、時々あたしらにも話してくるんですけど。そのキリストさんの話をいつも聞いてきて、そのせいで、何て言うか、心が成長したって言うんでしょかねえ。あるときなんか、上のせがれが突然こんなことを言い出しましてね。社会的地位とか学歴とか、そういう変わりやすいものを生きがいにして生きる人生はむなしだよ、お父さん」なんてね。いや驚きましたよ。こっちはまだガキだと思ってるのに、結構しっかりしてやがる、なんてうれしくなちまってね。

真由子　　そういうこと、教会で習ってたんですか？

主人　　いや、習ってたっていうか、時々部屋に入ると、聖書なんか置いてあって、壁にはその聖書の言葉らしいのがはってあんですよ。えーと、なんだっけな。そうそう、我は道なり、真理なり、命なり。キリスト」なんてね。そういうところから、何て言うか、人間にとって一番大切なものとかを学んでたんじゃないですかねえ。

ナレーション　　それから家までの帰り道、さっきのラーメン屋のおじさんの話が、何となく頭の中に残っていた。母も何か考えているふうだった。

母　　真由子、お母さんね、さっきのおじさんの話聞きながらね、高広のこと考えてたわ。

真由子　　あたしも、同じ東大でも、大分違うなって思っちゃった。

母　　あのおじさんと比べて、ずいぶんひどい教育ママだって、お母さんのこと思うかもしれないけど。

真由子　　う、うん。でもそれほどでは…。

母　　ううん、いいの。お母さんだってね、あのおじさんのほうが正しいことは分かるわ。十数年前の高広の中学受験の時だって、分かったたのよ、頭の中では。“こ

んなふうには子供らしさを奪う教育はよくない、今の受験地獄は異常だ”って、
真由子 それならどうして...。
母 頭では分かっているけど、でも、そういう正しい大人としての客観的な判断をしちゃいけない、と思ってたの。だって、いくら「間違ってる」と叫んだところで、周りの状況は少しも変わらない。なら、そんな社会の中で、いかに自分の子を守るか、そっちを考えるほうが先決だったのよ。だからああするしかなかった。正論をいくら言っても、自分の子は守れないって。だから高広が東大に受かった時、お母さん、「勝った」と思ったわ。これで、この子が幸せな人生を送れる切符を手に入れたって。でも本当にそうだったんだろうかって、今になって思うようになったわ。正直なところ、お母さんは、あの子の人生にとって一番大切なことを教えてやれなかったのかもしれない。そう思うと、やりきれないわね。

真由子 お母さん...。
ナレーション その時、わたしは、ここ 1 年ほどの母の悲しみの本当の意味が、少し分かったような気がした。

真由子モノローグ 今あたしは、高校受験という一つの分かれ道に立ってる。それは、ほんとにささやかな 15 歳の選択。きっとこれから、もっともっと大きな道を選ばなきゃならないときがたくさんある。そんなとき、自分の選択のよりどころとなる、しっかりした価値観みたいなもの、あたしは持ってるかな。

ナレーション そう思ったわたしは、さっきのラーメン屋のおじさんの言葉をふっと思い出した。
真由子モノローグ 我は道なり。キリスト」か...。
ナレーション その、不思議に心に響く言葉をかみ締めながら、わたしは母と二人、無言で夕暮れの道を歩いていった。

< 完 >